

創造の回復 シリーズ 6

神の救いのご計画

—創世記から黙示録まで—

島先克臣

2015年1月

# 目次

I	天地の創造.....	1
II	神に背を向ける.....	4
III	ノアの箱舟.....	5
IV	アブラハムへの三つの約束.....	7
V	律法の描く共同体.....	8
VI	律法の目指す祝福（申命記）.....	11
VII	王の使命.....	13
VIII	イスラエルの失敗と懲らしめ.....	15
IX	メシア待望.....	17
X	メシアなるイエス.....	19
XI	十字架と復活.....	20
XII	昇天と再臨の約束.....	22
XIII	継続するメシアの業.....	24
XIV	聖霊降臨と教会.....	27
XV	新しい天と新しい地.....	28
XVI	今を生きる.....	30

## 初めに

聖書は多くの人々が長い期間にわたって書き、まとめてきたもので、66巻もの書にはそれぞれ特徴があり、歴史的背景も違います。しかし、聖書には全体を貫いている一つのメッセージがあります。そのメッセージとは、「神が世界を造り、世界を愛し、人間の背きにも関わらず、世界を贖い完成する」というものです。そのメッセージを意識して読むときに、個々の聖書箇所が一層意味をなしてくることになります。この小冊子の目的は、創世記から黙示録まで概観しながら、そのメッセージを浮き彫りにすることにあります。

聖書の全てを簡潔に概観するために、触れることのできなかつた事柄が多くあります。様々な解釈や異なる視点を取り上げる事もしませんでした。それは聖書のバックボーンとなるメッセージを分かりやすく伝えるというこの小冊子の目的の故と考え、お許しいただきたいと思えます。

## 使い方

1. 各單元にある「聖書」のあとには、その単元の中心となる聖書箇所をあげています。できれば先ず、その箇所をお読みください。
2. 次に、その単元の大切な点を解説し、まとめています。
3. 各單元最後に<ディスカッション>とあります。巻末の該当箇所に質問が書いてありますので、その質問に答えてください。質問は小グループのためのものですが、一人で考えても、単元を理解するために有益です。

聖書のメッセージの流れを簡単に概観したい場合は、解説の部分だけを読むのもよいでしょう。

## I 天地の創造

聖書 <創世記1、2章>

### A 神の愛

聖書の最初の章には、神が世界と人間を造られたことが記されています。ここで注目したいのは神の愛です。1：29、30によると、人間と動物のために食物を備え、養ってくださる神の姿が描かれています。無からすべてを創造される絶対者というだけではなく、神は親のように慈しんで下さる方です。この神の愛は、聖書全体を貫く、最大で中心的なメッセージです。

<ディスカッション>

### B 神の像(かたち)

次に大切なのは、聖書が人間をどのように語っているか、です。

人間をどう見るかは、宗教や哲学によって違います。ギリシヤ哲学では、人間存在の本質は靈魂であって、後に肉体を取ったと考えます。聖書によると、神は初めから人を霊肉一体の存在として創造しました。アダムに吹き込まれたのは、いわゆる靈魂ではなく、命を意味する「息」(ヘブル語：ネシャーマー)です。アダムは、息(命)が吹き込まれる前から霊肉一体の「人」(アダーム)であり、息(命)が吹き込まれて、生きるものになりました(創2：7)。また、ヘブル語の「霊」(ネフェシュ)は、靈魂を指したのではなく、肉体を含む人間の全てを指しました。聖書で言う「霊」や「肉」は人間の部分というよりも側面と理解した方がよいでしょう。

そのように霊肉一体である人は、「神の像(かたち)」に造られたとあります(創1：27)。教会は「神の像」を3つの側面から理解してきました。1. 神に似せて造られた、2. 他者のために生きるよう造られた、3. 世界を治めるために造られた、の3点です<sup>1</sup>。

### 1 神に似せて造られた

「人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて」(創1：26)とあるように、人は資質や能力において神に似せて造られました。

では、神にはどのような資質や能力があるのか、創世記1章にある神の創造の業を見てみましょう。特に神を主語とする動詞に注目すると、神のご性質を想像することができます。

1：1「創造した」から、神は創造性豊かな方であることが推測できます。順次、1：3「仰せられた」から言葉や意思をもっていること、1：4「区別された」から知性があること、1：4「良しとされた」から善悪の基準があること、1：28、29「食物となる」から愛に満ちた方であること、1：31「すべてのもの・・・非常に良かった」という箇所、ならびに、自然界の美しさから判断して、感性と芸術的センスがあることが想像できます。

私たちは、その神に似せて造られたので、人間の知性、芸術性、愛情や倫理は、神のそれに似ています。また、神は、創造性豊かな方なので、私たちも歴史を通じて、創造的に地上の営みをして来ました。

エデンの園の農夫だったアダムとエバのことを考えて下さい。土地を耕すアダムは、試行錯誤をしながら道具を生み出し、その道具を変化発展させていったと想像できます。アダムが最初に造った鋤(すき)と豎琴よりも、3年後のものの方がより機能的で、美しかったです。エバの織った布や描いた絵にも同じ発展が見えたことでしょう。神に似せて造られているので、人間はクリエイティブで、より良いものを生み出していくのです。

アダム以降、職業が多様化してきました。アベルは羊飼いとなり(創4：2)、ユバルは音楽家(4：21)、ツイラは鍛冶屋(4：22)、ニムロデは猟師・政治家(10：8、9)になりました。

その後、政治と経済、科学、建築、農業、芸術と文学、等、あらゆる分野において、人間の文明は絶えざる発展を遂げてきました。それは、神に似たものとして地を治めてきた結果なのであり、神の創造の業の継続とも言えるでしょう。

罪の故に、その発展が破壊的な方向で使われてきたことも事実です。例えばダイナマイトの悪用、政治機構によるアパルトヘイトの強化、東アジア儒教圏などに見られる「家」制度による女性への抑圧等です。だからといって、人間が神の像でなくなったわけではありません。それは、罪の故の歪みです。文明の破壊的な面だけを見て、神の像としての今までの営みを否定することはできません。

ですから、「創造本来のあり方の回復」と言った時、それは、決してエデンの園のような牧歌的な生活への回帰を意味しません。私たちに求められていることは、それぞれの生活の現場で、与えられた資質や能力を正しい方向に用いていくことです。創造性豊かに、よりよいものを、より美しいものを生み出し、愛と正義に生きていくことです。キリスト者は、人間が神に似せて造られていることを知ったのですから、皿洗いから国際政治にいたる生活のあらゆる分野で、喜んでそのような歩みをしていきたいと思うのです。

<ディスカッション>

## 2 他者のために生きるよう造られた

神の像の第二の面は、私たちが愛の関係に生きるように造られているということです。

三位一体の神において、父は子と聖霊のために、子は父と聖霊のために、聖霊は父と子のために存在しておられると言えるでしょう。私たちは、その神に似せて造られています。ですから、神と人の愛を受けとめ、また、神と人を愛

して生きることが、人の本来の姿です。完全な人間であるイエスは他者のために生きました。そこに真の人間性が見えます。

ですから人間社会は、互いが他者のために生きるという基盤の上に成り立っています。

エデンの園の生活を想像してみてください。園でのアダムとエバの新婚生活は幸せだったと思います。アダムはエバのために生き、エバはアダムのために生きていました。二人は神を愛し、委ねられた農園を心を込めて耕し守っていました。彼らは、神の像の本来の姿に従って生きていたので、幸せだったのです。

<ディスカッション>

## 3 地上の王として造られた

神の像の理解の第三の面は、人間が地上で果たすべき使命です。

この理解の鍵となるのは、創世記1：27の「神の像（かたち）」という言葉です。古代の中近東では、「神の像」は王のことを指しました<sup>2</sup>。「かたち」と訳されたヘブル語のツェレムは、目に見える像（ぞう）のことです。ですから、神の像とは、目に見えない天の神の、目に見える地上の像（かたち）、すなわち、神の地上における代理人として国を治める王を指したのです。

驚くべきことに、聖書では、この王を指す言葉が人間全てを指して使われました。私たち人間は、目に見えない天の神の、目に見える地上での代理人、神に代わって世界を治める王として地上に造られた、ということになります。それ故、神は次の28節で「地を従えよ」と命じられました。

エデンの園に戻りましょう。2：15には次のようにあります。

神である主は人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。  
(創2：15)

神はアダムに、園を耕し守るように言いました。「耕し守る」は「開発と保護」とも表現できるという意見があります。開発と保護は、農業だけでなく、自然界に働きかける人間の全ての営みを指しているとも言えると思います。エデン農園は地球全体から見たら小さな一部分ですが、人は次第に増え広がり、職業も多様化しながら、地上全体を治めるようになる。それが神のご計画でした。

人間には地球全体の管理が委ねられています。私たちの使命はこの地上で地に足を付けて生きることにあるのです。

今まで見てきた三つの面はそれぞれが不可欠で、有機的に関連しています。しかし、この第三の理解は他の二つとは違う重要性を持っています。第一の理解と第二の理解は、肉体を持たない天使にもある程度共通するかも知れません。しかし、第三の理解は、人間が肉体を持ち地上に置かれた理由を明らかにします。

「何故私たちに目に見える手足があるのか。」それは、地上を正しく治めるためなのです。

第三の理解が重要な理由がもう一つあります。第一と第二は今ここに生きるという実存的な面を強調しますが、第三の理解は、歴史と世界という時空の広がりの中で人間を理解します。私たち人間は、一瞬一瞬、今ここにしか生きられない存在ですが、同時に、過去を振り返って未来を見つめ、そして世界に目を向けて歩んでいます。これは私たちが世界を治めるべく造られているからです。

## C まとめ

まとめましょう。私たち人間は、第一の理解のように、神に似た資質や能力が与えられているので、喜んでそれを磨きます。心を込めて、考えながら、芸術的に、創造的に生きようとします。しかもそれは、第二の理解のように、他者のためです。神を愛し、人を愛し、自然を愛するので、与えられた資質や能力を喜んで使うのです。しかし、それで終わってはいません。そ

のような日々の歩みをしながら目指しているのは、第三の理解のように、神に任じられた王、神の代理人として、地球全体を大切に治めていく使命を全うすることです。

もし、アダムとエバが神に背を向けるようなことをせず、その子孫も神を愛し続けたならば、世界はこのような人間共同体で満ち、賛美と平和と喜びであふれていたことでしょう。それが神の創造の目的でした。神は人と世界を愛し、そのような幸いなあり方を望まれたのです。

## <ディスカッション>

## II 神に背を向ける

聖書 <創世記 3 章>

### A 神に背を向けた結果

創世記 2 章までの大変よかった世界が、3 章に入ると一転します。人は神に背を向け、心に歪みが生じました。その結果、夫婦の間に亀裂が生じます。女は出産が苦しみとなり、男は労働という喜びが苦しみとなりました。また、自然界は呪いを受けました。<sup>3</sup>

神に背いたからといって、人に与えられた資質や能力がなくなったのではありません。人は、それを間違った目的、方向で使い始めたのです。大量破壊兵器は科学の発展を間違った目的、方向で使う例です。

人間は、他者のために生き、神と人と自然界との良い関係を保つはずでした。しかし、神を利用するようになって偶像礼拝が始まりました。他者を利用するようになって家庭が機能不全に陥り、社会の中では盗み、殺人、搾取、戦争が始まりました。世界の貧富の差は増すばかりです。

自然を自分の目先の利益のために利用するだけになって環境問題が生まれました。

神の代理人として愛と正義をもって地を治めるはずであった人間は、自らを神とする暴君となりました。その結果、地に悪が増大し、環境は破壊されてきました。

### B まとめ

人が神に背を向けた結果、神の像は歪み、自然界はのろわれてしまいました。これほどまで重大な違反を犯したアダムとエバ、そして、世界を、神は見捨てても不思議ではありません。ところが、神は問題を解決する約束を与え（3：15）、裸であることを知った二人のために皮の衣を作って着せてくださいました（3：21）。神の愛は変わらなかったのです。

<ディスカッション>

### III ノアの箱舟

聖書 <創世記9：1-17>

神に背を向け、神の像に歪みが生じた人類はその後も罪を犯し続け、「地上に人の悪が増大」（創6：5）したと記されています。そのため、神は「地上に人を造ったことを悔やみ」「心を痛められた」（創6：6）と語り、「人を地の面から消し去ろう。人をはじめ、家畜やはうもの、空の鳥に至るまで」（創6：7）と決断されます。また、神は次のように仰せられます。

すべて肉なるものの終わりが、わたしの前に来ている。地は、彼らのゆえに、暴虐で満ちているからだ。それで、今わたしは、彼らを**地**とともに滅ぼそうとしている。（創6：13）

#### A 滅ぼす？

「非常に良かった」はずの被造世界が滅ぼされるとあります。それは、世界のすべてを消し去って無に帰すということでしょうか。いえ、違います。

神は、すべてを消し去ろうとしたのではありません。ノアという正しい人に目を留め（6：8-10）、ノアとその家族、そして一つがいくつかの動物たちを救い、大地に戻す、というのが神のご計画でした（創6：18、19）。なぜでしょう。その理由を理解する鍵はノアとの契約にあります。

#### B ノアとの契約

ノアとの契約には約束と命令が含まれます<sup>4</sup>。約束は、神が一方向的に宣言してくださったもので、9：8-17にあり、その中心は11-13です。

「わたしはあなたがたと契約を立てる。すべて肉なるものは、もはや大洪水の水では断ち切られない。もはや大洪水が地を滅ぼすようなことはない。」さらに神は仰せられた。「わたしとあなたがた、およびあな

たがたといっしょにいるすべての生き物との間に、わたしが代々永遠にわたって結ぶ契約のしるしは、これである。わたしは雲の中に、わたしの虹を立てる。それはわたしと地との間の契約のしるしとなる。」（創9：11-13）

ここを見ますと、ノア契約の対象は人類（9節）だけでないことが分かります。他の被造物（12節）、そして大「地」（13節）そのものとも契約を結んでいます。その約束の中心は、「もう水で滅ぼさない」というものです。

命令は9：1-3にあります。

それで、神はノアと、その息子たちを祝福して、彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地に満ちよ。野の獣、空の鳥、一地の上を動くすべてのもの—それに海の魚、これらすべてはあなたがたを恐れておのこのう。わたしはこれらをあなたがたにゆだねている。生きて動いているものはみな、あなたがたの食物である。緑の草と同じように、すべてのものをあなたがたに与えた。」（創9：1-3）

ここで、最初の人類アダムに与えられた「生めよ、ふえよ、地を満たせ」（創1：28）という命令が、ノアと子供たちに繰り返されます。生き物を人に「ゆだねている」、というのは、「治めよ」ということの別の表現と言えるでしょう。食物を与えるという神様の慈しみ深い配慮も繰り返して現れています。

#### C まとめ

ノアの洪水という出来事は、私たちに何を語っているのでしょうか。神は、すべて肉なるものと**地**を滅ぼすと言われましたが、世界を消し去ろうとしたのではありません。もしそうならば、「非常によい」世界を地上に完成するという計画を捨て去ることになります。神は洪水を用いて、神に背くあり方を滅ぼしたのであり、そのことによって被造世界を新しくし、人類に再出発のチャンスを与えたのです。

ノアの洪水は、被造世界を見捨てずに、幸い



な計画を必ず実現させる、という神の強い意志  
の現れなのです。

<ディスカッション>

## IV アブラハムへの三つの約束

聖書 <創世記 12 : 1-3>

洪水の後、ノアの子孫たちは、せつかくの再出発のチャンスを逃しました。神に喜ばれる共同体で地を満たすという使命を果たす事ができなかったのです。特にバベルの塔の出来事(創 11章)は、それを端的に現しています。バベルの塔において、人類は建築技術に見られる知性<sup>6</sup>を神に対抗するという間違った方向で使いました。またメソポタミアの一地方から離れるのを拒み、地を満たせという神の命令に逆らいました(11 : 4)。結局ノア以降の人類も、自らの力では神の像としての本来の生き方ができませんでした。

そこで、神ご自身が行動を開始します。神はアブラハムというひとりの人をメソポタミア地方のウル<sup>7</sup>から導き出して次のような約束を与えました。

主はアブラムに仰せられた。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」(創 12 : 1-3)

ここには神がアブラハムとその子孫に約束したことが三つ書かれています。

1. 土地を与える
2. 祝福し大いなる国民とする
3. 全世界を祝福する基とする

この三つの約束は、その後、アブラハムに繰り返し語られ(創 15 : 18-21、22 : 15-18)、アブラハムの子イサク(26 : 1-5)とイサクの子ヤコブにも(28 : 4、13、14、35 : 12)継承されていきます。

創世記の後半には、約束に関して新たな側面も述べられています。国々が祝福されるには、アブラハムの子孫が正義を行わなければならないこと(18 : 18、19)、また、その祝福は、ヤコブの子孫、ユダ族が国々を正しく支配することによってもたらされるとあります(27 : 29、49 : 10)。

<ディスカッション>

## V 律法の描く共同体

聖書 <申命記4：1-8>

アブラハムへの三つの約束は、出エジプト、律法の授与、そして、王制の開始によって実現に向かいます。

### A 約束の地へ（出エジプト記）

アブラハムはメソポタミアを出てカナン之地に滞在するようになりましたが、ヤコブの時代になると一族は飢饉のためにエジプトに逃れます。その地で一族の人口は飛躍的に増え、「大いなる国民となる」という約束が一部成就します。しかし、土地はまだ与えられていません。そこで神はモーセを用いてイスラエル人をエジプトから導きだし、カナン地方に導いていきます<sup>8</sup>。

### B 律法の描く共同体（申命記）

イスラエル人は、エジプトでの数百年の奴隷生活を通してエジプト文化の影響を強く受けたことでしょう。そのため、彼らは人間本来のあり方を、基本から教えられる必要がありました。その教えが律法です。律法はエジプトから出て間もなく、シナイ山<sup>9</sup>においてイスラエルの民に与えられました（出19章以降参照）。

では、これから申命記律法が描く共同体がどのようなものか、見ていきましょう。

#### 1 神を中心とする共同体

出エジプト記20章にある十戒の前半は、主のみを神として愛し礼拝せよ、という戒めです。数百年もの間、異教の民エジプトの中に住み、影響を受けていたであろうイスラエルの民に先ず教えなければならなかったのが、「造り主であり、贖い主である唯一の神を愛しあがめること」でした。律法の中心にあるのは最も大切な神礼拝です。

そのことは、幕屋にも現れています。幕屋には神の臨在を表す契約の箱が安置されました。

その幕屋は荒野を旅する民の中心にありました。荒野で宿営する時、幕屋を中心にして12部族がその周りにテントを張りました。契約の箱が動くときに民は動き、止まるときに民も留まりました。神が地上で民と歩んで下さり、民は神を中心とした生活をする。それを表したのが幕屋でした。

神の臨在だけではありません。人が罪を犯したら、いけにえを携えて幕屋に行き、祭司に渡して罪の赦しを得なければなりません。神に近づくには、罪が赦されなければならない、と教えたのが祭司といけにえの制度です。

また、「過越の祭」、「七週の祭」「仮庵の祭」といった祭りによって、エジプトからイスラエルを救い出した主を覚え続けることを教えました。

イスラエルの人々は、律法の示す十戒、幕屋、祭司といけにえ、祭り、によって、神を中心にして生きるよう指導されたのです。

#### 2 愛と正義に満ちた共同体

この愛と正義は、神ご自身の性質から来ているものでした。律法にこうあります。

あなたがたの神、主は、神の神、主の主、偉大で、力あり、恐ろしい神。かたよって愛することなく、いろいろを取らず、みなしごや、やもめのためにさばきを行い、在留異国人を愛してこれに食物と着物を与えられる。あなた方は在留異国人を愛しなさい。（申10：17-19）

またレビ記には次のように書かれていて、その後には律法が続いています。

イスラエル人の全会衆に告げて言え。あなたがたの神、主であるわたしが聖であるから、あなたがたも聖なる者とならなければならない。（レビ19：2）

この言葉は律法の心髄を現しています。神に似せて造られている人間だからこそ、神のようなあり方が地上で求められています。神が愛に満ち、正義を行う方だから、神の民もそうでなけ

ればならない、というのです。

神のご性質は、弱者への愛です。ですから、申命記 15 : 11 にこうあります。

貧しい者が国のうちから絶えることはないであろうから、私はあなたに命じて言う「国のうちにいるあなたの兄弟の悩んでいる者と貧しい者に必ずあなたの手を開かなければならない。」(申 15 : 11)

律法は現実的です。罪人の集まりである社会には、必ず貧しくなる者が出てきます。律法はその現実をふまえて、そのような貧しい者をどのように助けていけばよいのかを具体的に述べています(申 15、24 章)<sup>10</sup>。

神は、司法の面でも正義を求めました。全ての町に裁判官を置くよう命じたうえで(申 16 : 18)、こう言われました。

あなたはさばきを曲げてはならない。人のかたよって見てはならない。わいろを取ってはならない。・・・正義を、ただ正義を追い求めなければならない。そうすればあなたは生き、あなたの神、主が与えようとしておられる地を、自分の所有とすることができる。(申 16 : 19-20)

もちろん商取引、ビジネスでの公正を求められました。

あなたは袋に大小異なる重り石を持っていてはならない。あなたは家に大小異なる枡を持っていてはならない。あなたは完全に正しい重り石を持ち、完全に正しい枡を持っていなければならない。あなたの神、主があなたに与えようとしておられる地で、あなたが長く生きるためである。すべてこのようなことをなし、不正をする者を、あなたの神、主は忌みきらわれる。(申 25 : 13-16)

その他、奴隷の扱い方<sup>11</sup>、敵の捕虜の女性の扱いかた<sup>12</sup>、婚前交渉、姦淫・獣姦、離婚<sup>13</sup>について、また、迷っている家畜の取り扱い方<sup>14</sup>、等、細かい戒めが書かれています。

ここで一つ覚えておくべきことがあります。

律法は生活全てを網羅しているのではなく、生活の基本的あり方や精神を、いくつかの具体例を通して教えているということです。例えば、申命記 22 : 8 は、新築の家の屋上に手すりをつけるよう命じて、転落事故の防止が意図されています。しかし、それは、手すりさえ付けておけば、あとはどんな家を建ててもよいということではありません。家を建てる時もあらゆる面で、愛と正義を基盤にする、屋上に手すりを付けるのはその一例なのだ、という意味です。律法は、生活の細部に至るまで愛と正義を実践することを、いくつかの例を示して命じているのです。

神ご自身の性質が愛と正義であるが故に、律法は、貧しい者への愛、司法とビジネスでの公正、その他、生活のあらゆる場面での愛と正義を求めています。それが、イスラエル社会の精神となるべきものでした。

### 3 自然界を正しく治める共同体

律法には自然界への配慮が見てとれます。

例えば出エジプト記にはこうあります。

6 年間は、地に種を蒔き、収穫をしななければならない。7 年目には、その土地をそのままにしておき、休ませなければならない。・・・6 日間は自分の仕事をし、7 日目は休まなければならない。あなたの牛やろばが休み、あなたの女奴隷の子や在留異国人に息をつかせるためである。(出 23 : 10-12)

ここで、自分だけではなく、土地、また、牛やろばが安息律法の対象になっています。また申命記は無益な森林伐採を禁じています。

長い間、町を包囲して、これを攻め取ろうとするとき、斧をふるって、その木を切り倒してはならない。その木から取って食べるのは良いが、切り倒してはならない。まさか野の木が包囲から逃げ出す人間でもあるまい。(申 20 : 19)

畑、牛、ろば、木々、これらの自然界を、神が

愛し治められるように愛し治めよ、ということです。これは、「地を支配せよ」とある創世記 1 : 28 の一つの適用でしょう。

まとめ

律法は、神を中心にして、互いへの愛と正義に満ち、自然を守り育みながら生きる共同体を描いています。愛と正義は、貧しい者や奴隷に対する態度、司法、ビジネス、家の新築のあり方まで、生活のあらゆる面に現れています。

<ディスカッション>

## VI 律法の目指す祝福（申命記）

申命記には、律法を守った場合に与えられる祝福が書かれています。

### 1 約束の地を所有できる

「あなたがたが行うようにわたしの教えるおきてと定めとを聞きなさい。そうすれば、あなたがたは生き・・・地を所有することができる。」（申4：1。11：8も参照）

### 2 その地で増え、幸せになり、長く生きることができる<sup>15</sup>

「守り行いなさい。そうすれば、あなたは・・・乳と蜜の流れる国で大いにふえよう。」（申6：1-3）

「あなたも、あなたの後の子孫もしあわせになり、あなたの神、主が永久にあなたに与えようとしておられる地で、あなたが長く生き続けるためである。」（申4：40、11：8、9）

### 3 異邦人への証しとなる

「これ（律法）を守り行いなさい。そうすれば、それは国々の民に、あなたがたの知恵と悟りを示すことになり、・・・彼らは、『この偉大な国民は、確かに知恵のある、悟りのある民だ』と言うであろう。」（申4：6-8）

「あなたは主の室の民であり、あなたが主のすべての命令を守るなら、主は、賛美と名声と栄光とを与えて、あなたを主が造られたすべての国々の上に高くあげる。そして、約束のとおり、あなたは、あなたの神、主の聖なる民となる。」（申26：18b、19）（「祭司の王国、出19：5、6参照」）

この祝福を見ますと、アブラハムに与えられた三つの約束との関係が見えてきます。

1. 約束の地を所有できる、というのは、アブラハムへの第一の約束と同じです。

2. その地で民が増え、幸いとなり、長生きとなるというのは、アブラハムへの第二の約束と同じです。

3. 律法を守ることによってイスラエルが「祭司の王国」となり、異邦の民への祝福となるというのは、アブラハムへの第三の約束と同じです。

つまり律法は、創造本来の人間共同体をカナンの地に形成し、そのことにより、イスラエルが諸国民への祝福の基となる、という目的で与えられた、と言えるでしょう。これは、まさにアブラハムへの約束の成就へと向かうものです。

### 4 被造世界の回復

律法の中には自然界との関連で興味深い記事があります。イスラエルの人々は、エジプトの地では労苦して畑に水をやったが、約束の地は「天の雨で潤っている」（申11：10、11）と言われます。これは、エデンの園が霧と川で「潤っている」という創世記2：6、10との結びつきがあると思われま

す。また、神はカナンでの生活の祝福を描いて言われます。

わたしは.. 雨を与えよう。あなたは穀物と.. ぶどう酒と.. 油を集めよう。また、わたしは、あなたの家畜のため野に草を与えよう。あなたは食べて満ち足りよう。（申11：14、15）

ここでも、エデンの園とのつながりがあるようです。創世記1章にはこうあります。

わたしは.. 草と.. 実を結ぶすべての木をあなたがたに与える。それがあなたがたの食物となる。また地のすべての獣・・・のために、食物として、すべての緑の草を与える。（創1：29、30）

また、祭りの時には、穀物、家畜の初子等を携えて家族とともに主の前に出て、

主が祝福してくださったあなたがたのすべての手のわざを喜び楽しみなさい。（申12：7。12：12、18も参照）

と命じられます。アダムの罪の結果、自然界はのろわれ、いばらとアザミを生じさせました。労働は生存のための苦しみとなりました（創3：17-19）。しかし、律法を守る時、自然界がのろいから解き放たれて、豊かに産物を生みます。そして、手のわざ、すなわち労働は苦しみから「楽しみ」に変えられます。神の恵みの故に世界が本来の姿に回復するのです。

#### まとめ

イスラエル人が律法をまもり、前章のような共同体を形成できたならば、イスラエル人は、カナンの地を「永遠に所有し」「長く生き」るはずでした。そして、カナンの地は水で潤い、豊かに産物を生みだし、労働は喜びとなるはずでした。そして、そのような豊かで幸いなイスラエルの共同体の姿は、世界の民に影響を与え、世界にもその祝福が及ぶはずだったのです。

律法が描くカナンの地への祝福は、エデンの園への祝福を思い起こさせます。律法が目指しているのは、本来の人間共同体を地上で確立させることです。アダムの子孫とノアの子孫が達成出来なかったことを達成させ、罪と死とのろいを逆転させ、創造本来のあり方をカナンの地に、そして全地に回復させるのが、律法の目的でした。律法は「すべての民族を祝福」しようとする神の愛のあらわれだったのです。

<ディスカッション>

## VII王の使命

聖書 <詩篇72篇>

律法が与えられたイスラエルは、正しい歩みができるはずでした。しかし、律法が与えられた後の荒野での歩みも、不信仰と不従順の連続でした。彼らは律法に従うことができなかつたのです。

### A 荒野から王制へ

そのようなイスラエルの民を神は見捨てず、40年もかけて荒野をさまよわせて、次の世代の人々を訓練し、神の民にふさわしく変えていきます。荒野においてイスラエルの民は神に信頼し従うことを教えられ、一つ一つの部族内の組織が整い、部族と部族の間の結びつきが強まり、また、戦いの経験も経て、一つの民族として強固となっていった様子が描かれています。(民数記)

そのように整えられて行ったイスラエルの民はヨシュアに率いられてカナンの地を占領していきます。(ヨシュア記)

しかし、最初の世代が死に絶えると、イスラエルは再び律法から離れていきます。イスラエルが不信仰になると周辺国から攻撃されます。しかし、民が悔い改めると神は士師と呼ばれる指導者を立ててイスラエルを救う、ということが繰り返されます。(士師記)

当時、イスラエルの周辺国家は王を中心とした専属の軍隊を持ち、益々強くなっていきました。イスラエルの民も同じように王と軍隊を求め始めました。預言者サムエルはそれを神への不信仰ととらえましたが、神はそれを許し、神を中心とする王政が始まりました。初代の王がサウル、次がダビデです。ダビデはエルサレムを首都としました(西暦前1000年頃)<sup>16</sup>。(サムエル記)

### B 王の使命

イスラエルの王の第一の使命は何だったでし

ょうか。それは、民の心を神に向け、社会正義を追求することでした。2サムエル8:15に「ダビデはイスラエルの全部を治め、その民のすべての者に正しいさばきを行った。」とあります。ヘブル語では、「公正と正義を行った」となります。

ソロモンの正しさを目の当たりにしたシェバの女王<sup>17</sup>は、次のように言わざるを得ませんでした。

あなたを喜ばれ、その王座にあなたを着かせて、あなたの神、主のために王とされたあなたの神、主はほむべきかな。あなたの神はイスラエルを愛して、これをとこしえにゆるがぬものとされたので、彼らの上にあなたを王として与え、公正と正義とを行わせられるのです。(2歴代9:8)

古代中近東の人々の考えによれば、王は公正と正義を行うために神によってたてられています。シェバの女王にとってソロモンは、当時の理想的な王と写ったことでしょう。また、カナンの地に注がれた神の祝福を見て、異教徒シェバの女王は主を誉め称えています。

詩篇72篇には、王の務めが公正と正義を行うことだという理解がはっきり現われています。この詩篇の中でソロモンは何よりも先ず、「あなたの公正」「あなたの義」(1節)とあるように、公正と正義が神から来るものであることを知り、それを神に祈り求めています。この祈りは、就任して間もないソロモンが神に祈り求めたものです(1列3:9)。正義と公正は、抽象的なものではありません。悩むもの、貧しいものを助け、虐げる者を打ち砕くという具体的なものです(2-4節)。ソロモンが公正と正義を行う時に、王国には豊かな平和が訪れます(5-7節)。それだけではありません。ソロモン時代には既にシェバの女王が贈り物を携えてきましたし、周辺の国家も支配下にありましたが(10節)、イスラエルの王は全世界の王となり、世界の諸々の王が仕えるようになる、とあります(8-11節)。なぜ、これ



ほどまでの祝福がもたらされるのでしょうか。  
その理由が次の12-14節に書いてあります。

<ディスカッション>

これは、彼が、助けを叫び求める貧しい者や、助ける人のない悩む者を救い出すからです。彼は、弱っている者や貧しい者をあわれみ、貧しい者たちのいのちを救います。彼はしいたげと暴虐とから、彼らのいのちを贖い出し、彼らの血は彼の目に尊ばれましょう。

次に王への祝福（15-17節）が続き、この詩篇は神への賛美で締めくくられます（18、19節）。

この詩篇の内容は次のようにまとめることができるでしょう。

王は、神から公正と正義が与えられて、貧しい者や悩む者を虐げている者の手から救い出す。それゆえ、王も王国も神の祝福を受ける、しかも、王は全世界を支配することになる。

このことは、アブラハムへの約束と関係しています。すなわち、アブラハムの子孫がカナンの地を所有し、増えて祝福され、イスラエルが世界の祝福の基となるという約束です。この約束は、イスラエルの王によって成就するということが示唆されているのです（詩篇110篇も参照）。

## C まとめ

律法と王制は一つとなって、神の王国をカナンの地に樹立させるものでした。神を愛し、愛と正義に満ち、カナンの地の自然界を愛情深く正しく治めるような王国を目指したのです。そして神は、敵からこの国を守り、雨を降らせ、穀物と家畜を豊かに与え、人を幸せにし、長寿を与える、と約束しました。しかも、この王国によって世界が支配され、全世界が祝福されるのです。アダムによってもたらされた人類の罪と死、また自然界へののろいが逆転し、創造本来のあり方が、全世界に回復される。これが律法と王によって実現されるはずでした。

## VIII イスラエルの失敗と懲らしめ

聖書 <イザヤ1：1-23>

### A イスラエルの王たちの失敗（1、2列王記）

紀元前1000年頃に王となったダビデ、そしてその子ソロモンの時代に、イスラエル王国は版図を拡大し、パレスチナ地方を支配するようになりました。その後は、イスラエルの王によって理想的な共同体が形成され、カナンの地は祝福され、イスラエルは全世界の祝福の基となるはずでした。

ところが、実際は、ソロモンはその治世の後半に外国の妻たちの影響で偶像を礼拝するようになります。ソロモンの死後は北部のイスラエル王国、南部のユダ王国に分裂し、混乱した政治が続いていきます。イスラエルの王たちは神に喜ばれる国づくりに失敗したのです。

イザヤ書の第一章には、イスラエルの王たちが律法を守れなかったことが記されています。

先ず1：2-9には、敵国の攻撃によって荒廃したユダの様子が描かれています。このような悲惨な状態になった理由は、ユダ王国の人々が主を捨てたからと言われます（4節）。主は21節で言われました。

どうして遊女になったのか、忠信な都が。公正があふれ、正義がそこに宿っていたのに。今は人殺しばかりだ。（イザ1：21）

エルサレムが忠実であったというのは、ダビデ王の頃です。ダビデの治世、またその子ソロモンの治世の前半は、エルサレムは公正と正義で満ちていました。公正、正義と言う言葉は預言者が好んで使う一対の言葉です。公正という言葉は裁判で正しい判決を下すというニュアンスがあります。また正義という言葉は神と人との正しい関係にあること、という含みがあります。ダビデ王は、国民を導いて、神との正しい関係、人との正しい関係を持つように国を治め

たのですが、次第にイスラエルは最初の忠実さを失ったと言われます。

ところが、ユダの人々は全焼のいけにえを捧げ、香をたき、新月の祭りと安息日をしっかりと守っていました（10-15節）。では、何故イスラエルは主を捨て、不忠実と言われているのでしょうか。

不忠実さの第一の表れは、ビジネスでの不正です。

おまえの銀は、かなかすになった。おまえの良い酒も、水で割ってある。（イザ1：22）

銀は当時ビジネスの通貨でした。その通貨が劣悪な品質になった、また、ワインは水で薄められたというのです。

不忠実さの第二の表れは、政治における不正です。

おまえのつかさたちは反逆者、盗人の仲間。みなわいろを愛し、報酬を求めている。（イザ1：23a）

国家の指導者は本来、反逆者や盗人から国を守るはずで、彼らは、賄賂や報酬を求めず国の内に正義と公正を求めるべきです。箴言にもこうあります。

王は正義によって国を建てる。しかし、重税を取り立てる者は国を滅ぼす。（箴29：4）

ここで重税と訳されている言葉（テルーモート）は贈り物という意味で、賄賂と訳すこともできます（新共同訳は「貢ぎ物」）。正義を追求せず自分の利益を求めるものは、国を滅ぼす、という意味になります。つまり、エルサレムの政治的指導者は正義でなく、報酬を愛して、国を滅ぼしていったのです。

不忠実さの第三番の表れは、司法における不正です。

みなしごのために正しいさばきをせず、やもめの訴えも彼らは取り上げない。（イザ1：23b）

社会の中の弱者、虐げられているものを守るのが国の指導者、王達の役目です。これは、前章で見たとおりです。しかし、弱者を助けるのは、国の指導者だけの責任ではありません。一般の人々のなすべきことでもありました。箴言はこう語ります。

正しい人は寄るべのない者を正しくさばくことを知っている。しかし悪者はそのような知識をわきまえない。(箴29:7)

国の指導者から民衆にいたるまで、ビジネス、政治、司法において、イスラエルは正義を失ったのです。

### B 神の懲らしめ―「のろい」の成就

その結果、イザヤ書1章の初めに描かれたような、敵の侵略、国土の荒廃、捕囚という懲らしめを神から受けることになります。

実際、北イスラエル王国は、古代中近東を広く支配した新アッシリア帝国によって前722年に滅亡しました。南ユダ王国はアッシリアを滅ぼした新バビロニア帝国によって前586年に滅亡することになります。その時、多くの民がアッシリアへ、あるいはバビロニアへ捕囚となって連れて行かれました。

神が律法を与えた時、それを守れば祝福すると約束しましたが(申28:1-14)、守らない時にはのろいが臨むとも警告しています(申28:15-68)。この捕囚は、律法を行わなかった結果でした。

### C まとめ

主はイスラエルにビジネスでの公正、政治での公正、司法での公正を求めました(イザ5:7も参照)。王をはじめ、一般の人々にいたるまでそれを求めました。生活全てにおける愛と正義が主への忠実さの現れだったのです。それは、主が愛であり正義の方だからです。

以上、人と人との関係に焦点を当ててみましたが、もちろん、彼らは秘かに、そして、次第に公に豊作の男神バアル、女神アシュタロテな

どの偶像を礼拝していきました。安息日毎に家畜を休ませ、7年毎に土地を休ませること、またヨベルの年を守ることもなかったでしょう。たとえ、責められることのない礼拝を守っていても、日常生活が墮落すれば、主への忠実さを失ったとされるのです。

そのような生き方に対して捕囚という神の懲らしめが待っていました。

<ディスカッション>

## IX メシア待望

聖書 <イザヤ1：24-2：5>

墮落したイスラエルに対し、イザヤやエレミヤなどの多くの預言者たちが神から遣わされ、民に向かって「悔い改めて神と律法に立ち返れ」と呼びかけました。悔い改めないならば、捕囚による懲らしめがあるとも警告しました。しかし同時に、主ご自身がエルサレムを贖い、きよめ、回復する、という希望も伝えました。イザヤ書1：24-2：5から、贖いと回復の約束に焦点を当ててみていきましょう。

### A エルサレムの回復

先ず、1：24、25には、主が来てエルサレムをきよめるとあります。

万軍の主、イスラエルの全能者、主の御告げ—「ああ。わたしの仇に思いを晴らし、わたしの敵に復讐しよう。しかし、おまえの上に再びわが手を伸ばし、おまえのかなかすを灰汁のように溶かし、その浮きかすをみな除こう。(イザ1：24、25)

かなかす、うきかす、とは、ビジネスや行政等での不正を指します。次に26節ではエルサレムを本来の姿に回復するとあります。

こうして、おまえのさばきつかさたちを初めのように、おまえの議官たちを昔のようになしよ。そうして後、おまえは正義の町、忠信な都と呼ばれよう。(イザ1：26)

初めのさばきつかさ、昔の議官とはダビデ王の側近です。主が来てエルサレムをきよめると、その指導者達はダビデ時代のように正義と公正を行うようになります。エルサレムの回復です(33：5も参照)。

### B 主が世界を治める

2：1-5を見ると、単にエルサレムが回復するのではなく、世界的な展望があることが述べられています。

アモツの子イザヤが、ユダとエルサレムについて示された先見のことば。終わりの日に、主の家の山は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、すべての国々がそこに流れて来る。多くの民が来て言う。「さあ、主の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を、わたしたちに教えてくださる。わたしたちはその小道を歩もう。」それは、シオンからみおしえが出、エルサレムから主のことばが出るからだ。主は国々の間をさばき、多くの国々の民に、判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍をかまに打ち直し、国は国に向かって剣を上げず、二度と戦いのことを習わない。来たれ。ヤコブの家よ。私たちも主の光に歩もう。(イザ2：1-5)

主がエルサレムにおられ(3節)、国々の民が主の言葉を聞きにエルサレムに来る(2、3節)。すると、「主は国々の間を裁き、多くの国々の民に判決を下す」(4節)とあります。すなわち、主がイザヤを通して約束している回復は単にエルサレムをダビデ時代に戻すというのではなく、主ご自身が全世界の王となり、その支配と正義が全世界を覆い、世界平和がもたらされる、と言うのです(4節)。

私たちは、律法と王制によってアブラハムへの約束が成就する、つまり、創造本来のあり方が世界に回復するという計画を学びました。しかし、人間の力では律法を守れず、人間の王にはそれだけの愛も正義も力もありませんでした。それ故、ついに、主ご自身が王として来て、神の救いのご計画を成就するというのです。イザヤ書では主とひとつとなった特別な王、メシアの到来を描いています。

### C 来るべきメシア

メシアとは「油注がれた者」の意味です(ギリシア語で「キリスト」)。祭司や王の職に就く者の上に、油が注がれたことに由来する言葉です。この言葉は次第に神とひとつとなった特別な王を指すようになりました。そのメシアとは

どのような存在なのでしょう。イザヤ書を中心に見て行きます。

### 1 栄光の王、苦難の僕

その方は「ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅くたて」（イザ9：7）、「正義をもって寄る辺のないものをさばき、公正をもって国の貧しい者のために判決を下」す方、すなわち、正義の王です（イザ11：1-4）。

その方はイスラエルの王となるだけではなく、全世界を正義をもって治めるようになります。

その日、エッサイの根は、国々の民の旗として立ち、国々は彼を求め、彼のいこう所は栄光に輝く（イザ11：10）。「国々に公義をもたらす・・・ついには、地に公義を打ち立てる」（イザ42：1-4）

ところが、不思議なことに、この「正しいしもべ」（イザ53：11）は、栄光に包まれているだけではありません。苦難の僕でもあります。この方は、私たちの病と痛みをにない、私たちの罪と咎のために神に罰せられ、神に打たれ、苦しめられ、ついに生ける者の地から絶たれる方でもあります（イザ53：1-8）。

### 2 被造世界の変化

この方が来ると、被造世界全体に変化が訪れます。

目の見えない者の目は開き、耳の聞こえない者の耳はあく。そのとき、足のなえた者は鹿のようにとびはね、口のきけない者の舌は喜び歌う（イザ35：5-6）

百歳で死ぬ者は若かったとされ・・・わたしの民の寿命は、木の寿命と等しく（なる）（イザ65：20-22）

そこにはもう、泣き声も叫び声も聞かれない（イザ65：19）。

狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏す（イザ11：6-9）

荒野に水がわき出し、荒地に川が流れる（イザ35：6）

わたしは裸の丘に川を開き、平地に泉をわかせる・・・わたしは荒野の中に杉や、アカシヤ、ミルトス、オリーブの木を植え、荒地にもみの木、すずかけ、檜も共に植える。（イザ41：18、19）。

### D まとめ

ダビデの子孫である王、神とひとつとなった特別な王が、愛と正義によって世界を治める。その時、人が長寿となり、自然界が豊かに美しく変わる。これは、墮落によってもたらされた罪と死、そして自然界へののろいを逆転させるものです。実はこれは、律法が描いた神の祝福でした。つまり、メシアの到来によって、律法が完全に成就すると言えるでしょう。アダムの子孫、ノアの子孫、そして、イスラエルの民と王に出来なかったことを、アブラハムの子孫、ダビデの子孫であるメシアが成し遂げるのです。全被造世界を巻き込む、この大きな変化は、「新しい天と新しい地」の創造と呼ばれます（イザ65：17）。この時、ついに、全被造世界に対する神のご計画が完成することになります。人々はメシアの到来を切に待ち望むようになりました。

<ディスカッション>

## X メシアなるイエス

聖書 <マタイ 6 : 9-13、ルカ 24 : 1-27>

### A 捕囚後

バビロンに捕囚となって行った人々は、ユダヤ<sup>18</sup>へ帰ることが悲願でした。新バビロニア帝国がペルシア帝国に滅ぼされると<sup>19</sup>、その願いがかなえられます。人々は、ユダヤに帰り、神殿を、町を、城壁を再建していきますが、それでも、過去の栄光は戻りません（エズラ記、ネヘミヤ記）。ペルシアの後には、シリア<sup>20</sup>、次にローマ<sup>21</sup>という異教の帝国によって支配され続け、民族としての苦しみは続きます。そのような苦しみは、自分たちが律法を守らなかった罪に対する神の懲らしめだとユダヤの人々はとらえました。そして宗教的指導者は、律法を厳格に守ろうとして聖書には書かれていない細かい教えを多く作っていきます。また、あるグループは荒野に退き、世俗との関係を絶って、清い生活を目指しました。指導者層の一部は、支配者とうまくやっていくことで苦境を乗り越えようとしています。反面、異教の支配者に対し神に頼って武器を取る過激派も現れました<sup>22</sup>。国内にはこの四つの流れに代表されるような色々な考え方や動きがありましたが、総じて人々は異教徒の支配からユダヤを解放してくれるメシアの出現を待ち望んでいました。そのような時に生まれたのが<sup>23</sup>、マリアの子、イエスです。

### B メシアなるイエス

成人したイエスは、宣教を開始して言いました。

悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。（マタ 4 : 17）

イエスの働きの中心は神の国です。「神の国」、あるいは「天の御国」は、「神が王として支配する領域」を意味します。旧約聖書の預言者たちは、世の終わりに神ご自身がもういちどエル

サレムに戻り、王となつてくださると預言していました。ついにその時が来たというのです。イエスこそ神の国を確立するメシアだということでもあります。そのことをイエスは奇跡、教えとたとえ、そして生き方、で示しました。

ユダヤの人たちはイエスの奇跡に目を奪われます。イエスは嵐を鎮め、5000人を養い、足の不自由な人、目の不自由な人、その他様々な病を癒し、悪霊を追い出していきます。このような奇跡の多くは、旧約聖書で預言されていたように、神のご支配が到来したことの証であり、イエスがメシアであることの印でした。

また、人々はイエスの素晴らしい教えを聞きました。ガリラヤの貧しい農夫や漁師たちは、「貧しく苦しめられている者が幸いなのだ」という教えを聞き、驚いたことでしょう。イエスは、富ではなく神に仕えること、敵をも愛すること、姦淫はもちろん、心の中で情欲さえいだいてはいけないことを教えました。偽善をさけ、心配せずに天の父を信頼して生きること、このような生き方こそ神のご支配の中に入れられた者の生き方であると教えました（マタ 5-8章）。また、イエスは、数々のたとえを使って神の国について教えました。

イエスは教えただけではありません。自ら敵を愛し、貧しい者や苦しんでいる者、飢えている者を助けるなどして、神の国に生きることを実践しました。

こうしてイエスは自らが旧約聖書のメシアであること、イエスによって神のご支配が到来したことを示しました。人々は、イエスこそ来べきメシアと信じるようになりました。

<ディスカッション>

## XI 十字架と復活

### A つまずきの十字架

ところが、イエスがエルサレムに入ると、メシアであるはずのイエスが捕らえられ、ローマの極刑である十字架にかけられて殺されてしまいます。しかも異邦の民ローマ人の手にかかってです<sup>24</sup>。異教徒を滅ぼすはずのメシアが逆に異教徒に殺される。これはイエスがメシアではなかったことを証明する出来事ととらえられ、ユダヤ人にとっては決定的なつまずきとなりました（1コリ1：23）。

それは弟子たちにとっても同じでした。弟子たちは、『イエスが王となったとき、右大臣になりたい、左大臣になりたい』と願っていました（マタ20：21）。そんな弟子たちでしたから、イエスが捕まった時には逃げ出し（マタ26：56）、イエスが死んでしまった時はユダヤ人を恐れて身を隠しました（ヨハ20：19）。エマオに向っていた弟子たちもこう言いました。

私たちの祭司長や指導者たちは、この方を引き渡して、死刑に定め、十字架につけたのです。しかし私たちは、この方こそイスラエルを贖ってくださるはずだ、と望みをかけていました。（ルカ24：20、21）

『イエスこそメシアだと期待していたのに、違ったのか！？』これが、イエスの十字架刑を目にした弟子たちの思いでした。

### B 復活による再確信

ところが、そのように意気消沈していた弟子たちの目の前に、よみがえられたイエスが現れました。そのことは、弟子たちにとってどのよう

な意味をもっていたのでしょうか。一言で言えば、「イエスはやはりメシアだ」ということです。

ペテロはエルサレムで集まっていたユダヤ人に対し、『神はイエスがメシアであることを奇跡によって示したが、あなた方はそのメシアを十字架につけて殺した』と迫りました（使2：22、23、36）。そして、旧約聖書を引用して、メシアがよみがえることを告げ、「わたしたちはそのことの証人である」（使2：32）と述べます。

また、ペテロは、自分たちがイエスの復活の証人だと語り、美しの門に座っていた人の癒しがイエスの名によると述べてユダヤ人を説得しようします（3：15、16）。以前イエスが自分の死を預言しても、ペテロはそれを受け入れようとしませんでした。今やペテロは旧約聖書を引用してメシアは苦しみを通らなければならない、と大胆に語ります（3：18）。復活のイエスと出会ったペテロは、メシアの苦難と死というつまずきを乗り越え、イエスはやはり「メシア」なのだを再確認して大胆に語り始めたのです。

使徒の働きを通して読みますと、その後、使徒たちが各地で伝えたのは、「イエスがメシア（ギリシア語でキリスト）である」というメッセージだったことが分かります（5：42、9：22、17：3、18：28）。例えばコリントに行ったパウロは、

みことばを教えることに専念し、イエスがキリストであることを、ユダヤ人たちにはつきりと宣言した。（使18：5）

とあります。使徒の宣教の中心は、「イエスこ

### コラム 神の国の今と将来の完成

神の国はイエスによって開始されましたが、すぐに地上で完成したわけではありません（ルカ19：11）。神の国は時間をかけて広がっていき、終わりの日に完成します。ですから、福音書を見ると、神の国が今ここに来ていると言われながら（ルカ11：20、17：21、マタイ11：12、21：31など）、将来完成する（ルカ13：29）という両面が表現されています。

そメシア」だったのです。

### C 十字架の意味

メシアが苦しまなければならなかった理由についても、「私たちの罪のため」に必要であった、という理解が弟子たちの中で深まっていきます（1コリ15：3、ロマ8：3、ガラ1：4、ヘブ10：12、1ヨハ2：2）。イエスはその血によって永遠の贖いを成し遂げた永遠の大祭司であり（ヘブ6：20、9：12）、すべての罪が赦され（コロ2：13、14）、十字架で流された血によって人は義と認められます（ロマ5：9）。しかし、イエスが十字架にかかったのは、罪を赦すためだけではありませんでした。十字架で流された血によって私たちの良心もきよめられ、生き方が変えられ、神に仕えることができるようになります（ヘブ9：14、1ペテ1：18、19）。しかも、十字架によって全被造世界が、地にあるものも天にあるものさえも、神と和解させられる（コロ1：20）のだという壮大な意味があることが分かってきます。

十字架上の死は、イエスがメシアでなかったことの証拠ではなく、神の民と全被造世界を贖い刷新し、完成するというメシアの業の中心だったのです。

### D まとめ

十字架直後の弟子たちの疑問は「イエスはメシアではなかったのか？」というものでした。その疑問は復活により解け、弟子たちは、イエスはメシアである、と大胆に宣べ伝えていきまし

た。また、メシアが死ななければならなかった意味もより深く理解するようになっていきました。

<ディスカッション>

### コラム 愛による神のご支配（神の国）

当時のユダヤ人の多くは、ローマ帝国からの政治的、あるいは軍事的な解放、といった力による神の支配、力による神の国の到来、を望んでいました。ところがイエスは「あなたに一ミリオン（約1500メートル）行けと強いるような者とは、いっしょに二ミリオン行きなさい」と教えました（マタ5：41）。これは恐らくローマ帝国などによる強制労働を背景にした教えでしょう。イエスは、神の国を広げる方法は武力による支配ではなく（マタ26：52参照）、敵をも愛し仕えることだと示しました（マタ5：44）。これは、当時のユダヤ人の常識を覆すものであり、弟子たちでさえ十分に理解できないことでした。



## XII 昇天と再臨の約束

聖書 <使徒 1 : 1-11>

さて、よみがえられたイエスと出会った直後の弟子たちに戻りましょう。イエスをメシアだと再確認した弟子たちは次に何を考えたのでしょうか。

使徒の働き 1 章を見ますと、弟子たちはイエスに「今こそ・・・国を再興してくださるのですか」（使 1 : 6）という質問をしています。イスラエルの再興というのは、メシアがイスラエルの王となり、世界を正しく治めるといことです。十字架にかかって一時頓挫してしまったかのように見えたメシアの業を、よみがえった今、なして下さると考えた訳です。

この弟子の疑問に対してイエスは「再興しない」とは答えていません。イエスの答えは次の節にあります。

いつとか、どんなときとかいうことは、あなたがたは知らなくてもよいのです。それは、父がご自分の権威をもってお定めになっています。（使 1 : 7）

旧約聖書のメシア預言は変更や中止になったのではないのです。

### A 昇天

次に、

イエスは彼らが見ている間に上げられ、雲に包まれて、見えなくなりました。（使 1 : 9）

とあります。弟子たちはイエスが天に上ったことで驚いたことでしょうか、それだけではなく、メシアの業、すなわち、全世界の悪をさばき、王として治めるといみ業が、今なされなかった、という戸惑いもあったらうと思います。

### B 再臨の約束

ところが、そのような驚きを味わう間もなく御使いが現れて言いました。

ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。（使 1 : 11）

弟子たちは、イエスの昇天を目撃し再臨の約束を聞いて当惑し、しばらくはその意味も悟れなかったのではないかと想像します。しかし、聖霊降臨後（後述）、弟子たちは急速に理解を深めていきました。それが明らかになるのは、使徒の働き 3 章のペテロの説教です。3 : 20、21を見ましょう

それは、主の御前から回復の時が来て、あなたがたのためにメシヤと定められたイエスを、主が遣わしてくださるためなのです。このイエスは、神が昔から、聖なる預言者たちの口を通してたびたび語られた、あの万物の改まる時まで、天にとどまっていなければなりません。（使 3 : 20、21）

確かにイエスはメシアである。今は天に留まっているけれども、救いの完成の時が来る。すると、神がメシアであるイエスをもう一度遣わしてくださる。それが回復の時であり、預言者たちが語った「あの万物の改まる時」なのだ、とペテロは語ります。イザヤはこの「万物の改まる時」を語りました。地上には正義が住み、戦争も、搾取も貧しさもなくなる。豊かさと喜びで地上が満たされる。自然界もすばらしいものに回復する、それが一時的ではなく、永遠に続く。とイザヤは語りました。その時が来るまでメシアであるイエスは天にとどまっていなければならない、というのです。

別のいい方をしますと、メシアによる救いの完成は後にのぼされた、ということになります。つまり、神は万物の刷新という救いの約束を反故にしたのではない。ただ、その救いの完成は今すぐではなく、イエスの再臨の時である、ということなのです。

## C まとめ

イエスは、天に昇られました。しかし、もう一度おいでになるときに、イエスは万物の刷新というメシアの業を完成します。弟子たちはその時を待ち望むようになりました（ピリ 3：20、2ペテ 3：13）。

<ディスカッション>

### XIII 継続するメシアの業

聖書 <マタイ 28 : 16-20、3 : 25-26 >

さて、ここで、もう一つの疑問が生じます。それは、「メシアの業は単に延期されただけなのか」という疑問です。イエスが死からよみがえったあの時点で、王として世界の悪をさばき、世界を新たにしてくださってもよかったです。それなのに、イエスはそれをなさらずに天に昇ってしまいました。では、イエスは、再び来られる世の終わりまで、メシアの業、すなわち、世界の王として、正しい統治をすること、を一切行なわないのでしょうか？世界が本来の姿に回復される、という旧約聖書の救いの預言は、ただ単に、イエスの再臨まで延期されただけなのでしょうか？そうではありません。

『イエスは弟子たちを通し、聖霊によってメシアの業を継続する』と聖書は語ります。

#### A 弟子たちを通して

よみがえられたイエスは、次のように命じました。

わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。(マタイ 28 : 18, 19)

「いっさいの権威」がイエスに与えられているのは、イエスが被造世界の主であり王であることを示しています。その主権に基づいて、この命令が下されています。この命令には動詞が4つあります。「行く」、「弟子とする」、「バプテスマを授ける」、「教える」です。しかし、その中の主動詞は一つだけで「弟子としなさい」

です。あとの3つは、その命令を達成する方法を示す分詞形です。つまり、大宣教命令の中心は弟子とするということ、そのために、行く、バプテスマを授ける、そしてイエスの命令をすべて守るように教える、ということになります。

ではイエスの命令とは何でしょう。それは山上の説教に集約されるように、神に信頼し、愛によって隣人に仕えて行く生き方をせよ、という命令です。イエスは命じただけでなく、それを実践して見本を見せました。つまり、バプテスマを授けただけでは弟子にしたとは言えず、山上の説教にあるように自ら生き、それを他の人々に教え守らせて、はじめて弟子としたと言えるのです。大宣教命令の中心は、自らイエスのように生きる、そしてイエスのように生きる者を生み出すことです。信仰と愛と正義に満ちた共同体で世界を満たせという創世記 1 : 26-28 の命令がここで回復されるとも言えるでしょう。また、イエスの命令は律法の基準にまさるもので、律法をまっとうすることになります。

しかも、そのような生き方ができるようにと、イエスは、世の終わりまで弟子たちとともにいると約束しました。つまりイエスはメシアの業を延期したのではなく、弟子たちを通して継続してくださるのです。

主が教えて下さった祈りには、

御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。  
(マタイ 6 : 10)

とあります。イエスの時代のガリラヤは、罪のない者の血が流され、貧しい者が益々苦しめられ、病いに苦しみ死んで行くという状況でした。そのような現実の中で、正義と愛に満ちた神の国が広がっていきますようにと祈る。弟子たち自身もそのために用いられることを願う。このようにメシアの業が継続するのが、イエスの弟子となった者の日々の祈りの中心となるべきだということです。

ペテロは、使徒の働き3章の説教の中で、ユダヤ人に向かい、あなたがたはアブラハムの子孫だと語ります。ユダヤ人がアブラハムの子孫であることは言うまでもありません。ここでの強調点は、あのアブラハムへの約束です。

あなたがたは預言者たちの子孫です。また、神がアブラハムに、『あなたの子孫によって、地の諸民族はみな祝福を受ける』と言って、あなたがたの父祖たちと結ばれたあの契約の子孫です。(使3：25)

ペテロは「あの契約の子孫」だと述べ、今こそ悔い改めたイスラエルが、神の祝福を地の諸民族にもたらす器になるのだと語ります。もちろん自分の力では不可能です。イスラエルにできなかったのは歴史が語る通りです。ここでペテロは、律法によっては出来なかったことをメシアがなしてくださるといいます。だからこそ、説教の最後にペテロは、こう述べて締めくくっています。

神は、まずそのしもべを立てて、あなたがたにお遣わしになりました。それは、この方があなたがたを祝福して、ひとりひとりをその邪悪な生活から立ち返らせてくださるためなのです。(使3：26)

これは単に個人的によい行いを始めるということに終わりません。地の諸民族を祝福する契約の子孫となるべく悔い改めるということです。別の言い方をしますとこうなるでしょう。

『メシアは天に上られて目には見えないが、メシアは世界の王となられ、メシアの業を続けておられる。その手足となるのが、悔い改めたイスラエルなのだ。』

## B 異邦人の間でも

悔い改めてメシアの業を継続することは、ユダヤ人だけでなく、「あらゆる国の人々」(マタ28：19)に求められています。パウロは言いました。

ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信

仰とをはっきりと主張したのです。(使20：21)

使徒パウロは、ローマ帝国内に住む異邦人(ユダヤ人以外の人々)への宣教に召されました。そこで、パウロは異邦人に対しても「イエスは旧約聖書が語るメシアである」と語りますが、同時に帝国内の異邦人が理解しやすい表現を使い始めます。その一つが「主」と訳されている「キュリオス」です。キュリオスは70人訳ギリシア語聖書で、旧約聖書のヤーウェの訳語として選ばれた言葉です。パウロは、それをイエスを指して使うことでイエスが神であることを示唆しました。しかし、それだけではありません。当時ローマ帝国内でキュリオスと言えば、帝国を異民族から守り、生活を隅々まで支配する皇帝も指しました<sup>25</sup>。パウロの手紙を読んでいたのは日々の生活で皇帝の保護と支配を感じていた異邦人のキリスト者です。その異邦人キリスト者に向かって、パウロは次のように書いています。

イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。(ピリ2：10、11)

主は私たちの主であるとともに、そのすべての人々の主です。(1コリ1：2)

ローマ皇帝ではなく、イエスこそ全世界を守り治めるまことの主、キュリオスである、だから、このイエスに従う生活をせよ、とパウロは異邦人に語り、導こうとしました(ロマ12：1、2、15：16-19)。また異邦人に対しても、イエスがまことの主として来られる、と再臨を語りました(1テサ4：13-18、5：23、1コリ11：26)。

ローマ社会に住む異邦人キリスト者が、再臨を待ち望みつつ、生活のあらゆる分野でイエスをキュリオス(主)として従う。これは、ペテ

ロがユダヤ人に伝えた内容と基本的には一つ  
です。

<ディスカッション>

## XIV 聖霊降臨と教会

聖書 <使徒2：1-39>

### A 聖霊降臨

イエスの昇天後、弟子たちの上に聖霊がくだります。これは旧約聖書も（ヨエル2：28-32）、イエスも（ヨハネ20：22）約束していたことです。今までの聖書が語る歴史で徹底的に明らかになったのは、人間には、神に喜ばれる生活をする力も愛も信仰もないということでした。そこで、神の霊、イエスの霊である聖霊が信仰者の内に住み、御心を実行できるように助けてくださるのです。

後に使徒パウロは、聖霊がキリスト者の内に住み、律法の要求を全うすると語ります（ロマ8：1-17、ガラ5：22、23参照）

### B 教会

聖霊によって、主でありキリストであるイエスに従う。この新しい歩みは、個々人が単独するものではありません。人は本来、共同体の一員として生きるように造られています。イエスによって個人が変えられる時、共同体も変えられます。イエスによって変えられつつある共同体、互いに励まし合ってイエスに従っていく共同体、それが教会です。教会の歴史は残念ながら単純に誇れるものではなく、今も欠けだらけかもしれません。しかし、それでも教会は、メシアの業を体現し、それを広めるよう召されています。イエスの弟子となるようにとの招きは、この共同体に加わって共に生きるようにとの招きでもあります。

### C まとめ

メシアの業、すなわち、全世界の王としての正しい統治はイエスが天に昇られたため延期されたではありませんでした。聖霊により、弟子たちを通して、また、その群れである教会を通して、イエスはメシアの業を継続しています。弟子である私たちは、先ず私たち自身が、家事

育児において、仕事において、地域や、国内国外での働きにおいて、イエスに頼りつつイエスの望まれるような生き方をして、世界を変えて行こうとします。また、そのようなキリスト者が世界中で起こされるような宣教を成し遂げようとしています。イエスはそのような私たちと世の終わりまで共にいて、聖霊により絶えず慰め励まし愛と力を注いでくださいます。そして、ついに再臨の時、神のご支配は地上に完成します。

### D 招き

この小冊子を今読んでおられるお一人お一人も、イエスを主（キュリオス）であり、キリスト（メシア）であると信じ、主により頼みつつ従う歩みを始めるよう神に招かれています。

神は、すべての人が救われて、真理を知ることになるのを望んでおられます。（1テモ2：4）

御自身の国と栄光にあずからせようと、神はあなたがたを招いておられます。（1テサ2：12、新共同訳）

この歩みは決して容易いものではありませんが、それは、真理と御国と栄光への道です（マタ7：13、ロマ8：17）。

<ディスカッション>

## XV 新しい天と新しい地

聖書 < 黙示録 21 : 1-4、22 : 1-5 >

世の終わりを説く終末論は、ただ未来を思いめぐらすためにあるものではありません。今の生活を変えるために書かれています。千年王国の捉え方は教派によって違いますが、すべての正統的な教派がイエスの再臨、人の復活、そして新しい天と新しい地の出現を信じ告白していますので、その共通点に注目してみましょう。

### A 復活、最後の審判、義認（黙示録 20章）

黙示録 20 : 11-15によると、世の終わりに死者がよみがえり、行いに応じて裁きを受けることとなります。そこで裁かれる罪は、偶像礼拝と私生活の罪だけではありません。日常の社会生活全てにおいて犯した罪、いわば、創造本来のあり方に逆らうこと全てが裁かれます。私たちは、み座の前で、問われるでしょう。

あなたは、わたしを愛し、人を愛し、正義を求め、わたしが委ねた地を正しく治めたか。またその様な共同体でこの地上を満たそうとしたか。

と<sup>26</sup>。その時、私たちには弁護して下さる主イエス・キリストがいます。神はその方の忠実さにより、十字架の死によって私たちを義と宣告され（ロマ 3-8章）、私たちは新たにされた地上に移されます。

### B 新しい天と新しい地（黙示録 21、22章）

黙示録 21、22章は、世界史のクライマックスです。神が本来意図された世界が完成します。それはどのようなものでしょうか。

先ず、神が地上で共にいて下さるという点です。天地創造の時、神はエデンの園でアダムとエバと歩まれました（創 3 : 8）。旧約の時代、神は幕屋をご臨在の象徴としました（1列 8 : 29）。新約聖書によると「ことば（イエス）

は人となって、わたしたちの間に住まわれた」（ヨハネ 1 : 14）とあります。現在、イエスは聖霊によりキリスト者のうちにてくださいます（ロマ 8 : 8-11）。そして世の終わりには、新しいエルサレムが天から新しい地に下ります（黙 21 : 2）。その時、地上における神の臨在が完成します。

また、新しい地には、エデンの園にあった（創 2 : 9）、「いのちの木」もあります（黙 22 : 2）。

神の像の回復という点ではどうでしょう。アダムとエバは「神の像」に造られました。それは、目に見えない神の、目に見える代理人として全世界を治める王を意味しました。旧約の預言者ダニエルは、「聖徒達が、国を受け継ぎ、永遠に、その国を保って世々限りなく続く」（ダニ 7 : 18）と語りました。現在、メシアの弟子となっているキリスト者は、愛をもって世界を導くよう召されています。そして世の終わりには、よみがえった者達は「永遠に王」となります（黙 22 : 5）。その時、エデンにおいてアダムとエバに期待されたあり方が成就します。ノアに命じられ、律法によりイスラエルに要求され、イスラエルの王が指導するよう求められ、イエス・キリストが模範を示し、今世界で教会が目指すべき生き方が完成します。新しい地は、神を愛し・愛と正義に満ち・自然との調和の中で生きる共同体によって覆われます（創 1 : 28 参照）。それが永遠に続くのです（イザ 66 : 22）。

この時、旧約聖書の律法の目的も、メシア預言も完全に成就します。新しいエルサレムを中心に、神とメシアなる王が、地上を治めます（イザヤ 2 : 2-4 と黙示 21 : 24-26 を比較）。

その日は人間だけの救いの日ではありません。被造世界全体は神に愛されて造られ、「非常に良かった」と言われました（創 1 : 31）。ノアの契約には被造世界全体が入れられました（創 9 : 9-16）。新約聖書によれば、全

## 神の救いのご計画

被造世界がキリストにあって和解させられるとあり（コロ 1：20）、また、被造世界は現在、人間の罪の故に苦しみをうめいているが、その時が来ると、滅びの束縛から解放されるとあります（ロマ 8：18-22）。その日は万物（コスモス）の完成の日です。神は世界を造り、世界を贖い、世界を完成するお方です。

<ディスカッション>



## XVI 今を生きる

終末における被造世界の完成は、キリスト者の今の歩みに影響を与えます。悪に対して裁きがあることを確信するので、絶望に終わりません。愛と正義を求める今の歩みは、新しい地において完成するという望みがあるので、善い行いをするよう励まされます。

また他者のために使う賜物は、永遠の価値を持ちます。私たちの肉体の復活を語るパウロの結論は次のようなものでした。

ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあつてむだでないことを知っているのですから。(1 コリ 15 : 58)

日々の生活において、主にあつてなすところの全ての営み(家事・育児、芸術を含むあらゆる仕事)が、来る日には火をくぐり、新しい地上に何らかの形でもたらされる、永遠の価値がある、という希望を持つことができます。

そして何よりも、天地創造から世界の完成まで貫いている神の愛を知り、生きる力が与えられます。

以上、被造世界に対する神の愛と救いのご計画という軸で、創世記から黙示録までの流れを概観してきました。今のキリスト者の歩みというのは、過去の創造を思い、未来の新創造を望む歩みです。私たちが生かされている今の時は、聖霊によって「神の像」が回復され、その使命を全うしつつある時代です。インドへの宣教師であり、宣教学者であったレスリー・ニュービギンは次のように言いました<sup>27</sup>。

聖霊がこの神のご計画の成就の保証である。聖霊の内に、キリストにあつて、万物が完成する時の前味を味わうことができる。聖霊によってこの完成の日を待ち望んで生きることができ、また、望みの通りになるという確信の内に生活できる。

その様に生き、生活する者は、たとえ、それが、意識していない言動であったとしても、完成を証しする証し人になるのである。この証しは、主に宗教的な言葉によるのではない。人類一般の世俗生活に関わることなのだ。なぜなら、{その様な生き方自体が} 栄化された人類であったイエス・キリストのうちに万物を完成させるという神のご計画を証しする証しだからである。

「人類一般の世俗生活」において、主により頼み、聖霊の助けによって主に従う歩み。これこそ、創造と贖いの主を指し示し、万物の完成の希望を世に与える光となるのです。

<ディスカッション>

## 神の救いのご計画

## ディスカッション

## I-A 神の愛

- a. 人間と動物のために食物を備えられる神と聞いて、どのようなイメージを持ちますか。今までの神のイメージと違いますか？

## I-B 神の像

## 1. 神に似せて造られた

知性（論理、科学、哲学）、芸術性（音、色、におい、味、感触）、体（運動、スポーツ）、言葉（言語学、文学）、道徳、感情、愛、といった能力や資質は神に似せて造られているためにあたえられています。

- a. 自分に特に豊かに与えられている面はどのような面だと思いますか。それをどのように楽しみ磨いていきたいと思いませんか。伴侶、同僚、友人として、互いに与えられている面を教えあい、励まし合ひましょう。
- b. 科学技術を含む文明の発展を無条件に賛美することも、拒絶することも、誤りである理由は何だと思いませんか。

## 2. 他者のために生きるよう造られた

- a. 自分の目標や夢を果たし、あるいは責務を全うするために、大切な人との関係を犠牲にしていることはありませんか？
- b. 自分の果たすべき責任と大切にすべき関係との葛藤をどのように乗り越えたらよいでしょうか。（バランスという考え方ではない解決を模索してください。）

## 3. 地上の王として造られた

- a. 創世記1章、2章を学んで、人間と世界をどう見るかという点で、新鮮だったこと、新たに教えられたことを分かち合ってください。
- b. 今日の仕事、奉仕、家事（掃除、料理、子育て）、また勉強によって、世界を正しく

治めるという、人としての使命を果たしていると感じていますか？もし感じていないとしたらなぜだと思いますか。どうしたらよいでしょうか？

## II. 神に背を向ける

- a. 神に似た資質や能力を間違った方向で使う例として何が挙げられますか？個人、家庭、また、社会、国家、世界のレベルで考えてみましょう。

## III. ノアの箱舟

- a. 神は何故、罪に満ちた世界のすべてを消し去って終わりにする、ということを行ななかつたのでしょうか。
- b. ノアへの約束と命令を見ると、神のどのような思いや計画が分かるのでしょうか（創9：1-3、11-13）。

## IV. アブラハムへの三つの約束

- a. アブラハムへの三つの約束はどのようなものでしたか（創12：1-3）。
- b. アブラハムへの約束は、どのような点で創世記1：28に関連していると思いませんか。
- c. アブラハムへの三つの約束が創世記を貫いて繰り返されているのはなぜだと思いますか。

## V. 律法の描く共同体

- a. 律法は生活のどのような領域に及んでいますか。
- b. 神の御旨を行うのは、私的な生活領域だけではなく、公の生活でも求められているのは、どうしてだと思いますか。
- c. 律法は弱者救済に項目数を割いています。それは何故だと思いますか。

## VI. 律法の目指す祝福

- a. 律法を守ることによってもたらされるカナンの地への祝福は、エデンの園の姿と似ています。それは何故だと思えますか。
- b. 神の民への祝福は、周辺国家に影響を与えるようです。どのような形で影響が伝わったと想像しますか？
- c. 私たちは神の民とされたものです。あなたの生活の場で、どのような具体的な歩みが求められているのでしょうか。

#### VII. 王の使命

- a. 詩篇72篇に見られる王の使命はなんですか（1-4節）。
- b. 王がその使命を果たすとどのような祝福が与えられますか（5-11節）。
- c. 王と律法が共に目指していることは何でしょうか。

#### VIII. イスラエルの失敗と懲らしめ

- a. 律法に従って神殿での礼拝を守っていたユダの人々は「遊女になった」と非難されています。遊女と言われたのは何故でしょうか。1：22、23の中から考えましょう。

#### IX. メシア待望

- a. メシアが来るとイスラエルはどうなりますか（イザ1：24-26）。
- b. メシアが来ると世界はどのように変化するのでしょうか（イザ2：1-5、35：5、6）。
- c. あなたが捕囚の民となってバビロンに連れて行かれ、そこで生活していると想像して下さい。自分がなぜ故郷から離れて苦しんでいるのか顧み、そしてメシアの到来を待ち望んでいるとします。その心情を自分の言葉で表現してみましょう。

#### X. メシアなるイエス

- a. 神の国とは、「神が王として支配する領域」という意味です。イエスの奇跡、教え、生

き方は、神の国について何を明らかにしましたか。

#### XI. 十字架と復活

- a. イエスが十字架にかかる前の弟子たちは、王に次ぐ位につきたいと願っていましたが（マタイ20：21）。なぜ弟子たちはそのような願いを持っていたのでしょうか。
- b. イエスが異教徒によって殺されてしまったことが、ユダヤ人にとってつまずきなのはなぜですか。
- c. エマオ途上での弟子は、イエスがメシアでなかったことに落胆しているようです（ルカ24：20、21）。なぜメシアでなかったと思ったのでしょうか。当時の弟子の気持ちになって答えて下さい。
- d. イエスはメシアでなかったのかと考え落胆した弟子たちは、復活したイエスと出会ってどのように変わりましたか（使2：36、5：41、42）。
- e. 弟子たちは、イエスの十字架の死をどのようにとらえていきましたか？

#### XII. 昇天と再臨の約束

- a. 復活したイエスに弟子たちが期待したことはなんですか（使1：6）。それは何故ですか。
- b. イエスの昇天と再臨の約束によって弟子たちのメシア像はどのように変化しましたか（使3：20、21）

#### XIII. 継続するメシアの業

- a. 大宣教命令の主動詞は何ですか
- b. どのようにそれを達成できますか。
- c. 私たちが目指すべき弟子としての生き方はどのようなもののでしょうか。イエスの教えと行いからイメージしてください。
- d. イエスをメシアとして、また、主（キュリオス）として従う時、あなたの生活はどのように変わると思えますか。

## XIV. 聖霊降臨と教会

- a. なぜ聖霊が信仰者の内に住んでくださるのでしょうか。
- b. 教会という共同体として、どのような歩みが求められていると思いますか。

## XV. 新しい天と新しい地

1. エデンの園と新しくされる世界の共通点は何かと思いますか。

## XVI. 今を生きる

- a. 神がついには悪を裁き世界を完成するという聖書の教えは、あなたの今の生活にどのような影響を与えていると思いますか。
- b. 「証し」は主にどのようになされるのでしょうか。

<sup>1</sup> 以下による分類。Millard J. Erickson, *Christian Theology*, One-volume ed. (Grand Rapids: Baker Book House, 1983), 495-517. 彼の分類は、1. Substantial (Traditional), 2. Relational (Brunner and Barth), 3. Functional (Reformed Theology). エリクソンは、1 を本質と見、2 と 3 はその派生的側面と見るが、三者は有機的に関連した、三側面とも理解できるだろう。存在論的理解は教会の中では非常に長い伝統を持つ理解である。関係的理解はバルト等により、戦後広まった理解である。使命的理解はオランダ改革派の中でもアブラハム・カイパーの流れをくむグループが強調してきている。使命的理解は、C.ライト、W.ダンブレル、N.T.ライト等の聖書学者にも影響を与えている。本小冊子はそれらの著作によるところが多い。

<sup>2</sup> Gordon Wenham, 英国チェルトナム市でのインタビュー、1999年6月。Edward M Curtis, "Image of God," in *The Anchor Bible Dictionary*, ed. David Noel Freedman (New York: Doubleday, 1992).

<sup>3</sup> 労働自体は墮落以前からあることに注意。罰は、労働そのものではなく、労働が苦しみとなった点。

<sup>4</sup> 聖書の契約は、古代の中近東で王が属国と結ぶ契約と似ていると言われている。古代中近東の契約では、王は属国を守ると約束し、属国は王に従うべしと命令している。どちらにしても一方的な宣言である。聖書の契約も、神が愛の故に一方的に結んで下さるもので、そこには、当時の契約のように、約束と命令の二つの面がある。

<sup>5</sup> このノアの出来事は、これから続く救いのモチーフともなっている。

1 第一番目は、創造本来のあり方に逆らう古いありかたがさばかれ、

2 次に、その中から選びの民が導き出され、

3 最後に、新しい地で創造本来のあり方に従った歩みができるようにする。

これから見るように、アブラハムも、出エジプトもこのモチーフに従っている。実は、教会も、そして、終末の完成も、これと同じモチーフをたどっています。それは、今後見ていく。

<sup>6</sup> 粘度に代わる瀝青（アスファルト）を生み出したことで、高層建築が可能になった（創11:3）。

<sup>7</sup> 紀元前3000年紀後半から2000年紀初頭に南メソポタミアのチグリス、ユーフラテス川沿いに栄えた諸々の都市国家の一つ。

<sup>8</sup> 時期に関しては紀元前1300年前後という説と、1450年前後という説がある。

<sup>9</sup> シナイ半島南部の山。現在のジェベル・ムーサーと伝統的に言われている。

<sup>10</sup> 最低4つの方法が申命記に書いてある。第一は、貧しくなって借金したが返せなくなっている者の場合である。その場合は7年目に負債を免除するよう命じられる。7年の終わり毎に（ただし外国人は別）負債を免除せよ。「そうすれば、あなたの内には貧しいものがなくなるであろう。」（15:4）「貧しい兄弟に対して、あなたの心を閉じてはならない。また手を閉じてはならない。」（15:7）とある。第二に、貧しさがよりひどくなり、身売りして奴隷となった者は、7年目に解放するよう命じられる（15:12）。第三に、奴隷まで転落してはいないが、貧しい賃金労働者の場合で、以下のように命じられる。「貧しく困窮している雇い人は、・・・虐げてはならない。彼は貧しく、それに期待をかけているから、彼の賃金は、その日の内に、日没前に、支払わなければならない。彼があなたのことを主に訴え、あなたがとがめを受けることがないように。」（24:14-15）。第四。イスラエルの社会には土地という生産手段がなかったり労働できない者がいた。在留異国人、孤児、やもめである。彼らに対する援助としては、穀物、オリーブ、ぶどう畑の収穫で、完全に収穫しつくすことなく、実を残すようにと主は命じる（24:19-22）。神は、イスラエル社会の中の貧しさの種類を分析し、それにふさわしい現実的な救済の方法を命じたのである。以下参照。Norbert Lohfink, *The Laws of Deuteronomy: A Utopian Project for a World without Any Poor?* (Cambridge: St. Edmund's College, 1996).

<sup>11</sup> 逃亡奴隷を持ち主に返すな（23:15）。

<sup>12</sup> 自分の妻にしてよい。しかし、一ヶ月泣く期間を与える。好まなくなったら自由にすること。「決して金で売ってはならない」（21:14）。

<sup>13</sup> 男の勝手な離婚の申し立てはゆるさない（22:13-19）。

<sup>14</sup> 無視せず、持ち主に返せ（22:1-4）。

<sup>15</sup> 律法の目的の中で長生きするということが繰り返されている。罪と死が入る以前は、人類は「長生き」たはずである。すなわち、イスラエルが律法を守った結果としてもたらされる祝福は、創造本来のあり方をカナンにおいて回復させるものと言えるだろう。

また、不従順の故の呪いも28、29章に書かれている。敗戦、少ない収穫（28:38、39）、災害、病気（28:59）、奴隷、死（28:48）などである。

<sup>16</sup> 紀元前1000年頃。

- 17 アラビア半島のイエメンにあったと推測される王国。エチオピア説もある。
- 18 南ユダ王国の滅亡後の地域は、ユダヤと呼ばれるようになった。
- 19 紀元前539年のオピスの戦い。バビロンに無血入城したキュロス2世は、ユダヤ人をはじめ、捕囚民を解放した。
- 20 アレキサンドロス大王の後継者の一人、セレウコス一世が築いたセレウコス朝ペルシア。後にシリア地方を基盤とした。特にアンティオコス4世は、ユダヤ人を迫害した。
- 21 紀元前37年よりローマの支配下に入る。
- 22 旧約聖書続篇のマカバイ記には、ユダヤ人が武力によりシリアからの独立を謀ったマカバイ戦争のことが記されている。
- 23 誕生は、紀元前4年、あるいは6年とされている。
- 24 紀元30年頃とされる。
- 25 N. T. Wright, *Paul in Fresh Perspective* (Minneapolis: Fortress Press, 2009)、4章参照。
- 26 神の基準に達しない人々は裁きを受けるとある。Gordon J. Spykman は、キリスト者の罪もみ前に暴かれるだろうと言う。 *Reformational Theology: A New Paradigm for Doing Dogmatics* (Grand Rapids: Eerdmans, 1992).
- 27 Leslie Newbigin. *Trinitarian Doctrine for Today's Mission*. Biblical Classics Library. Carlisle, UK: Paternoster Press, 1998, p. 53. { }内は訳者による挿入。

## 創造の回復シリーズ

神の造られた世界は秩序あるよいものでしたが、墮落の故に歪んでしまいました。しかし、神はキリストによって全被造世界を創造本来のあり方に回復し、また完成させようとされています。この小冊子シリーズは、創造秩序の回復と完成というキリスト教独自の視点で書かれています。

### No.1 終末の今を生きる：千年王国説の違いを超えて

私達の救いは、仏教やギリシャ思想のように魂が天に行くことで終わるものではありません。実は、キリストがもう一度地上に来て、私達を新しい地上によみがえらせ、全世界を変えて永遠に治めて下さるごところが救いの完成なのです。このキリスト教終末論は、聖書、古代教会の理解、また福音派の学者によって支持されているだけでなく、生活の現場での私達の日々の労苦が無駄でない、と語ります。(B5版、15ページ)

### No.2 神国論に見る新プラトン主義的靈性

救いが天上で完成するというのは、二元論的なギリシャの異教思想です。この異教思想は5世紀前後に西方教会(ローマ教会)に入って来たようで、アウグスティヌスの神国論にもその軌跡が見いだされ、それは、宗教改革者にも影響を与えています。(B5版、6ページ)

### No.3 内村鑑三の終末観：世界観的回心の体験

西方教会に入って行ったギリシャの異教思想は、プロテスタントに引き継がれ、内村鑑三も二元論的な救済観を持っていました。しかし、内村は、1918年にそれまでの救済観から脱却し、古代教会が持っていたような聖書的な救済観・終末観に開眼し、生き方が変化して行きます。(B5版、3ページ)

### No.4 デートの原則、結婚、性

婚前交渉と墮胎をする若者の年齢は益々低年齢化しています。その背後には、自分と異性また、性と結婚に対する間違った考え方があります。この小冊子は聖書が語る人間観、性、結婚観を出発点として、デートの原則を探ります。高校生以上の方々、中高生科のスタッフ、またご両親方にお勧めします。(B5版、13ページ)

### No.5 世界観とは-そのストーリー性と変化の可能性-

世界観とはなんですか?それは知的な理解や信条よりも、もっと深く私達を形作っていて、誰しもが持っているものなのです。普段は意識しないメガネのようなこの世界観に関して、その「ストーリー性」に焦点を当てながら、私なりの理解を述べていきます。(B5版、9ページ)

### 著者紹介

島先克臣(しまさき かつおみ) 1954年埼玉県久喜市生まれ。二十歳の時入信。立教大学英米文学科、聖書宣教会、米国ゴードン・コンウェル神学校旧約修士、英国チェルトナム・グロースター大学旧約博士過程(ヘブル言語学)終了。牧師(日本1981-87)、宣教師(フィリピン1988-93。2000-04ではマニラのAsian Theological Seminaryで旧約学とヘブル語を教える)。3児の父。

神の救いのご計画 -創世記から黙示録まで-

2015年1月1日 発行

著者 島先克臣

発行者 島先克臣

〒346-0002 埼玉県久喜市野久喜 835-6

ウェブサイト [www.cwn.way-nifty.com](http://www.cwn.way-nifty.com)